



▲講義：難解な科目は予習復習もたいへん
▲実験：まだ慣れない実習では器具の操作にも緊張しがち



平成13年度 東京大学入学式

▲入学式：日本武道館における東京大学入学式

特集

21世紀の東京大学 II

さまざまな立場から
本学の未来に寄せる期待と提言



▲応援
応援にも熱が入る



▲野球
伝統を誇る六大学野球での活躍



▲五月祭
講堂前での五月祭のコンサート風景



▲学位記：大講堂でおごそかに学位記授与式



▲卒業式：勢ぞろいした学部長に見守られて総長から授与される卒業証書

新しい世紀そして新しいミレニアムに、世界と大学はどのような変貌を遂げてゆくのでしょうか。
また、東京大学は「21世紀の問い」にいかにか答えてゆくのでしょうか。

東京大学には毎年、学部には約3200名が、また大学院には2700名あまりがそれぞれ入学し、
数年間の学生生活を過ごして、社会へと旅立ってゆきます。
教職員と学生を合わせた数は3万7千人にも上ります。

東京大学の未来は、これら東京大学を構成する一人一人の未来とともにあるといってもよいでしょう。

本号では、前号に引き続き「21世紀の東京大学」というタイトルで少し違った角度から特集を組むことにしました。
今回は、本学から巣立って社会のさまざまな分野で活躍されている卒業生の方々や、
本学と関わりの深い方々から「21世紀の東京大学」について忌憚のないご意見を頂きました。

紙面の制約から字数は限られていますが、
それぞれのご意見には東京大学の未来を展望するためのヒントが随所に散りばめられているように思えます。



▲食堂
楽しく話も弾む昼食風景



▲三四郎池
講義の合間に三四郎池のほとりで語らいのひとつき



▲駒場祭
秋も深まり色づく銀杏の下で模擬店に人だかり

利根川 進 教授



利根川進(とねがわすすむ)マサチューセッツ工科大学(MIT)教授。同大学学習と記憶センター所長。東京大学運営諮問会議委員。六三年京都大学理学部卒業。六八年カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院修士博士取得。八二年MIT生物学部およびがん研究所教授。八七年ノーベル医学・生理学賞受賞。

日本の大学は独立行政法人になる可能性が高い。私はこれを研究・教育体制を改革するチャンスであると捉えています。いろいろな点で改善が望まれると思います。

まず学部学生の教育ですが、私は、学部教育は、もっとliberal arts、いわゆる教養を高める教育をするべきであり、専門教育は大学院で行うべきであると考えます。学部で専門教育を学ぶのは早すぎますし期間も短いと思います。教養の教官、専門の教官の区別を薄くして、専門的なテーマであっても教養を高めるといった目的に貢献する必要があります。専門教育には、例えば、法學系ではlaw schoolのような形態が必要でしょうし、医学系であれば、臨床へ進むならばmedical school、基礎ならば理学系などとともに生命科学の統合したプログラムを作成するべきでしょう。学部を卒業して社会に出る人には、専門家というよりは、広く高い教養を身につけることが有効だと思います。

す。また東大には、社会のリーダーの養成をウイジヨンとして欲しいと思います。産業界に行くのなら「会社を作る」ぐらいのリーダーシップを持った人材を世に出して欲しいと思います。東大は、Soldierではなく将校を育てることをウイジヨンとすべきだと思います。

次に研究の体制ですが、特に理科系についてはですが、三〇代の若い研究者を独立させなくては行けないと思います。アメリカでは教授と独立して研究室を持ち大学院生の指導をするAssistant Professorの制度がありますが、このような制度を導入するべきです。Assistant Professorは日本の助手と違いpermanentではありません。研究費も教授と公平な競争で獲得します。この職を六〜七年経験した後には教授として適格かどうかの厳正な審査が行われます。厳しい制度のようですが、創造性の高い研究者を育てるためには非常に有効です。あくまで一つの指標ですが、ノーベル賞を受賞した人のうち四分の三位は、Assistant Professorの時代の仕事です。体力も気力もあり、リスクを背負うことができ、必要な知識も伴っているのはこの時期なのです。アメリカの大学が高い創造性を有しているのはこの制度を採用していることが一つの大きな原因だと思っています。

三つ目は、入試制度を含めた諸制度の改革です。入試制度にはもっと多様化した判断基準が求められます。例えば、MITでは、学力試験の他に、高校の成績と推薦書、受験者のinterview、受験者の書いたessayなどにより総合的に判断します。MITは、独立独歩の精神が見え、リスクを背負うことを厭わない人を選びます。そういう人材

を卒業させるのがMITの義務であると考えています。また、現在、東大では科類に分け入試を行っていますが、科類に分けずに入学させることも考えて欲しいと思います。学部で教養を高める中で、本人もやりたいことがわかってきます。そして学部学科の定員枠を緩くし、学生が進みたい分野に行ける努力をするべきです。例えばMITでは、学生は特定の学部にも所属するのではなく、「私のMajorは生物学です」といいます。このMajorは二つ以上でも構いません。生物学と法学をMajorとするような人も社会には必要だと思っています。

東京大学は、広い教養を身につけた独立独歩の人材を育てて欲しいと思います。東大のブランドではなく、実質を育てて欲しい。大学が大志を抱くことが必要だと思っています。

二〇〇二年一月九日 東京大学医学部総合中央館においてインタビュー

アンドルー・ゴードン教授



アンドルー・ゴードン(Andrew Gordon)ハーバード大学教授。E.ライシャワー日本研究所所長。東京大学運営諮問会議委員。七五年ハーバードカレッジ卒業。八二年ハーバード大学大学院修士博士取得。九一年デューク大学教授。九五年より現職。

大学にとって最も重要な使命は、研究と

教育を両立することであると思います。確かにこの二つを両立することは難しいことであると思います。しかし、私が見る限り、東京大学をはじめ日本の大学の教授には、教育者としての意識が薄いように感じられます。やや極端に言えば日本の教授の多くは教育に対して熱心ではありません。一方、日本の学生も質の高い教育を要求しません。つまり学生の教育を受けたという意識、消費者としての意識も低いのです。まず、この状況を壊さなくては行けません。日本と比べると授業料が高いということもあるのかもしれませんが、アメリカではその分、講義に対する要求が高いのです。教授が下手な講義をすれば学生は文句を言います。一種の消費者意識が高いのだと思います。

私も日本の大学で講義したことがありますが、一週間で学生に読んでもらうページ数の少なさに驚いたことがあります。つまり教授から学生に対する要求が少ないのです。しかし学生の要求も低いため、これに対して文句がありません。また、これは特に文科系と社会科学系の学生に対して感じるのですが、「読む」ことだけでなく、「書く」ことも重要です。客観的なデータはありませんが、私の印象として、日本の学生が「書く」量は非常に少ないように思います。やはりアウトプットがないと成長できません。学部学生の教育では「考える力」をつけることが重要だと思いますが、そのためには、「書く」量、

「話す」(ディスカッション)量をもっと増やす必要があると思います。東京大学に入学する学生はやる気があると思いますので、教官はそれだけのものを課してもよいと思います。また、「落第」を増やすという案もあります。「卒業するまでにかなりのことをしな

Expectation & Suggestion <<<

「なければならない」という意識を持つにはそれが必要かもしれません。教官が研究者としての意識を持つこと、そして学生は「学位が重要」ではなく「学びたい」という意識を持ち、厳しい授業を望むことが必要であると思います。

大学院教育も重要です。大学院教育の基本は研究者を育てることですが、大学の教官になる人は、大学院時代に教育方法を学ぶことも必要だと思います。しかし、現実にはこれがほとんどなされていません。Teaching Assistantなどの制度をもっと活用し、教育者としての意識を高くすることが必要であると思います。また、そのような教育者の育成システムの整備も必要だと思います。

もう一つ、東京大学は、日本の大学としてよりは世界の大学としての意味を考えるのが望ましいのではないかと思います。その意味で、二一世紀の大学には多様性が必要であると思います。外国人学生も以前と比べればかなり増えましたが、もっと増えてもよいと思います。また教官にも外国人が増えてもよいと思います。世界のトップレベルの教官が来ることは刺激になりますし環境が豊かになります。女性の教官、他大学出身教官が増えることが絶対必要である。

【二〇〇二年一月九日東京大学山王会館応接室においてインタビュー】

高橋 真理子

高橋真理子(たかはし まりこ)：朝日新聞論説委員、医療・科学技術担当。七九年東京大学理学部卒業。同年朝日新聞社入社。岐阜支局、東京本社科学部、出版局「科学朝日」編集部、大阪本社科学部次長などを経て九七年より現職。



日本全体の知的活力をあげるために、東大はどうあるべきか。考えなければいけないのは、そのことだと思う。言ってみてもなく、それは世界全体の知的活力を向上させる方策にもなるだろう。

まず思いつくのは、東大が大き過ぎないか、ということだ。教員数は日本一で、二十七九人朝日新聞社刊「大学ランキング二〇〇二」から。以下のデータも同様。国公立二位の京都大学は一七七六人と千人も少ない。こうした教員の多さも反映して、科学研究費、外部資金とも受け取り額は断トツ一位である。校舎面積は、学生数日本一の日本大学に一位を譲るが、悠々と二位につけている。

独占、寡占状態は活力低下につながる、というのが一般的な考え方だ。フェアな競争ができる状況を作り出すことが望ましいという発想のもとで、国鉄は分割民営化され、NTTは東西二つの地域通信会社と長距離通信専門の会社、それに移動体通信を扱うNTTドコモに分かれる形に再編された。三年前のその改革の結果、市内の通話料金が一瞬に安くなったことは記憶に新しい。

国立大学の間ではいま、統合の嵐が吹き荒れている。そうしなければ弱小大学は生き残れない、という強迫観念にさらされているようであるが、活性化をキーワード

として考えるなら、大き過ぎる大学の分割も考えられていいはずだ。それなのに、文部科学省は一言もそんなことは言わない。東大も言い出さない。

東大一極集中構造が続く限り、教員に自校出身者の占める割合が図抜けて高いという、世界のアカデミズムから見ると非常識な状況は変わらないと思う。東大は経済学部系こそ教員純血率五八％で国内四位だが、法学部系は九七％、工学部系は八八％で、ともに国内一位である。

いや、東大は海外の大学と互角の勝負に挑む、そのためにオールジャパンで最強の大学にしておくべきだ、という主張もあるかと思う。ただ、それは「途上国型」の発想ではなからうか。自国の中に競争を作り出さなければ、フロントランナーとなるのは難しいように感じる。

とはいえ、アカデミズムの世界がガチガチの競争社会になるのが望ましいとも思えない。そもそも競争と縁の薄い学問分野もあるだろう。同じ競争でも、ナンバー一ではなく、オンリーを目指す場合も多い。これからの大学に競争原理がより強く働くのは間違いないものの、それで精神が貧しくなったりは元も子もない。

競つていれば、勝つこともあれば負けることもある。仮説が当たることあれば、はずれることもある。遊びの余地を残し、余裕を持つて競争を楽しむ。それができる大人の集団が、二一世紀に望まれる東大像なのかもしれない。それは、望まれる日本像にも重なる。

丸川 珠代



丸川珠代(まるかわ たまこ)：テレビ朝日アナウンサー。九三年東京大学経済学部卒業。同年テレビ朝日入社。スーパーチャネル、たけしのTVタックル等担当。昨年の東京大学卒業式で司会。

卒業後、テレビ業界で十年を過ごした。この業界で何より大切なことのひとつは人間関係だ。東京大学にいたことは、得られた人脈を除けば、中身としてそれほど価値はない。東京大学という「看板」が時には役立つこともあるが、これも使い方を誤ると、人を遠ざける。どんな人間関係を持っているかは、仕事の質をも左右する。取材相手からどれだけの質のいい情報を得られるか、番組に優秀なスタッフを集められるか、出演者の気持ちに乗せて自分の望む演出を実現できるか、どれをとっても、人との関係をいかに育ててきたかにかかっている。十年間そういうことばかり考えていたから、二一世紀の東京大学を語るなど、大それた話だ。だから、異端の場所に居る者から見えることだけを話そうと思う。

東大生は優秀だ。基本的な知識のレベルが高い、根は真面目で、一生懸命努力する。理解力があるから仕事が速い。ただ、残念なことには、才能を活かすことが下手だ。才能を活かすには、環境が必要だ。自分が優

秀でさえあれば、世間が勝手に才能を活かす場所を与えてくれると思うのは、大きな間違いで、どんなに優秀な人間でも、自分の力で光ることは難しい。才能を認め、育て、より輝きを増すような場所を与えてくれる、周囲の人間という環境がなければ、才能は活かされず、枯死するのみだ。

だから東大生はもっと愛される存在になっただけがいい。あらゆるタイプの人間から愛されるようなプライドや努力の見せ方を学ぶ、自分が優秀であることを臆面なく伝えられるような、周囲からの愛情をまず勝ち取るべきではないか。多くの人に愛されることほど強いことはない。自分を愛してくれる総ての人の力を借りることが出来る。どれほど優秀でも、独善や妬みは才能を簡単に潰す。

エリート意識を失えと言うのとは違つて、上から見下ろしているだけでは、現実とは動かないことを知って欲しいだけだ。戦後築かれてきた様々な神話が崩壊する中で、エリートへの信頼も失われた。過剰なプライドは踏みしだいてしまつて、世間に分け入り、周囲からの信頼と愛情を得なければ、エリートとしての責任を果たすことが叶わなくなっているのではないか。

大学もまた、社会の中にある。どれほど素晴らしい研究者や研究機関を抱えていても、活かされなければ、存在がないのと同じことである。社会を構成する多くの人々に存在価値を認められなければ、東京大学といえども存在感を失っていくだろう。

二一世紀が終わる頃にも、東京大学が価値ある存在と認められて欲しい。だから東大生には、優秀な才能を最大限活かすべく、愛されることの大切さを自覚して欲しい。そして、東京大学には愛される東大生を育てて欲しい。

飯塚 哲哉



飯塚哲哉(いつかてつや)、サイエレクトロニクス(株)社長。七年東京大学大学院修士、工学博士。東芝勤務を経て、九一年サイエレクトロニクスシステム研究所を設立。九二年サイエレクトロニクス(液晶パネル向けLSI)の設計・開発・販売している半導体ベンチャー企業を創業。九三・九四年東京大学先端科学技術研究センター客員教授。

う文化ではありません。ダーウィンは進化論の中で「生き残るのは最も柔軟に変化に対応できる個体である」と述べています。もつと変化することにより成長するべきでしょう。日本では成功や蓄積があると守りに入つてしまいがちです。東大生にも、入試合格で人生に成功したように思い込み、ブランドを一生大事に守つて生きてしまつた人がいます。しかし、そのブランドは海外ではまったく通用しません。若い皆さんには、ぜひ新しい世界に飛び込んで国際的な価値観を身につけてほしいのです。本当のエリートは守りに入つたりはしません。ブランドがあるのがエリートではなく、優秀だからエリートなのです。

私は一九九一年に今のベンチャー企業を立ち上げました。理由の一つは日本の技術者たちをなんとかしたかったからです。シリコンバレーや台湾などの諸外国では、技術者の何割かは事業家でもあります。つまり技術によって得たストックを使って新しい企業を興したり投資したりしています。そうではなくとも技術者の選択の幅が非常に広いのです。国の豊かさの指標の一つに選択肢の広さがあると思いますが、日本は非常に選択肢が少なく、とても先進国とはいえない状況です。企業でもいわゆる「生え抜き」の人が重役になることがいまだに多いのではないのでしょうか。

同じように、大学の教官にも、もつと選択肢があつて欲しいと思います。大学教官でベンチャー企業を興すような人も増えてほしい。アメリカはもとより、アジアでも台湾や韓国でももつと自由に人が動くことができます。また優秀な大学ほど人の出入りが多いように思います。そういった交流の盛んな国はいきいきとしています。東大はもつと失敗をしてもよいのではないのでしょうか。そうで

ないと、いつか取り返しつかない大きな失敗をすることになるかもしれません。また日本は競争を嫌う国でもありますが、先生方も学生ももつと競争した方がよいのではないかと思います。スポーツでの競争のようにカラツとした競争をしただけでよいと思います。東大には、自ら変化し、異質なものと進んで交流し、失敗や敗北をも恐れないような本当の意味での優秀な人材を育ててほしいと思います。

二〇一二年一月三〇日インタビュー

香川 照之



香川照之(かがわてるゆき)、俳優。八八年東京大学卒業後、NHK大河ドラマ「春日の局」でデビュー。以後、映画、テレビ、舞台などで活躍。一昨年、中国映画「鬼が来た」、「独立少年合唱団」と、出演作がカンヌ、ベルリン両映画祭で連続受賞。「鬼が来た」は、この四月二十七日よりシアター・イメージフォーラム(渋谷)と新宿武蔵野館を皮切りに、全国順次公開。現在NHK大河ドラマ「利家とまつ」に豊臣秀吉役で出演中。

私は、一九八八年三月に文学部社会心理学科を卒業しました。大学時代はサークルにも入っていませんでしたし、高校までの友人たちと遊んでいました。大学では帰るべきクラスも根付く所もなく、海の中に放たれたような感じでした。教養時代は麻雀ばかりで、本郷ではなんとなく講義に出てい

Expectation & Suggestion <<<

ました。日本には「大学に入ればそれで終わり」という考えがあり、私も当時はそう感じていたのだと思います。しかし、今からすれば、もっと学んでおくべきことがたくさんあったように思います。例えば、海外に留学し、世界観、価値観の異なる文化に接することにより人間を磨くことができればよかったと思います。

私は、現在、俳優をしています。俳優は台本という二次元を三次元にするのが仕事ですが、最初の頃は、事務的に役を演じていたように思います。しかし、ある時から、理屈ではなくセリフを語っている自分に出会えるようになり、台本の「奥にあるもの」に触れ、生きている実感を持てるようになってきました。今思うと、大学時代には学問を機械的に記号として記憶するのみの「奥にあるもの」まで学んでこなかったように思います。

私も高校時代は「勉強ができればよい」「成績の良いことが即ち人間として優れていること」と思っていました。しかし、現実にはそうではありません。やはり学問と人間性を繋いでゆかなくてはならないと思います。「自分が何かをしなれば」という自負があるのならば、その分、人間を磨かなくてはならないと思います。

目に見えることに勝つだけが勝者の道ではありません。「自分さえよければ」で勝てる人はいくらでもいます。東京大学には「目に見えないこと」を大切に育ててほしいと思います。学業は大切な人間の素養の一つだと思います。それとともに、人を下から支える心、感謝、優しさ、愛情といった「目に見えないもの」「奥にあるもの」を育み、学業と結びつけてほしいのです。心と

体、あるいは心と頭とが一つとなった本当の意味で優れた人が育つてほしいと思います。東京大学にはこのことを最も高いレベルでやってほしいと思います。私の中でも、かつてはそれが一つになつていかなかったと感じています。例えば、大学時代に物理学の高尚な本を読み涙を流す友人がいました。当時の私には理解できませんでしたが、今なら少しわかるような気がします。

今の地球には困難が満ちています。東京大学にはそのように心と頭が一つになり、地球を救つてゆくような人を育ててほしいと思います。本当の意味で優れたリーダーとなり世界を導いてほしいのです。それができる人が集まっている場所が東京大学だと思います。

そのためには、講義も工夫が必要かもしれません。大学の講義では、先生と学生、人と人が近いという実感をあまり持てませんでした。映画館や芝居では、入る時と出てくる時では人の表情が違います。同じように、講義の前と後で人が変わるような講義をして頂きたいと思います。これは先生方のアイデアも努力も必要だと思います。心に燃える何かを持った先生にそういう講義をして頂けたらと思います。

私も、東大の方々に負けないような自負、高い志を持ち、「見えるもの」と「見えないもの」を繋ぎながら自分の道を歩んでゆきたいと思っています。

二〇〇二年一月三日 インタビュー

田中 俊恵

田中俊恵(たなかとし恵)神奈川県保土ヶ谷警察署長。八九年東京大学法学部卒業。同年警察庁入庁。滋賀県警察本部防犯少年課長、警察大学校警察政策研究セン

ター教授、埼玉県警察本部捜査第一課長等を経て二〇〇〇年九月から現職。



バブルの頃に法学部を卒業した。真面目な学生ではなかった。学問に魅力を感じることができず、他に熱中するものもなく、ふらふらとしていた。そんな自分に二世紀の東京大学について語る資格があるとは思えないが、私なりに今後の大学に期待することについて述べてみたい。

一つめは、旧来の社会システムでは適切に対応できない新たな社会問題について総合的に研究し、研究の成果(対応策)を世に問うことである。二一世紀、社会は予想もつかないスピードで変化しているが、官庁は所掌事務にしばられ、所掌がはつきりしない問題が見つかると、引張り合いや押付け合い、調整などで、最良の策を講じられない場合がある。そもそも問題として認知できないこともある。現在、各官庁では、法令や制度の制定改廃を検討するに当たって大学の先生方のご意見を伺うことが多いが、テーマも提言内容も、諮問を受けた先生方の専門の範囲内かつ当該省庁の所掌事務の範囲内に限定されてしまう。最近の大学では様々な学際的研究が行われているとのこと、社会のあらゆる面で、刻々と変化していく実態を捉え、問題を鋭くえぐり出し、学問分野や大学の枠にとらわれずに英知を結集

し、研究の成果として問題への対応策を世に発信していただければと願う。

二つめは、魅力ある人材を社会へ供給することである。東大卒と言えば、記憶力が高いが独創性に乏しくおとなしいというイメージを持たれており、残念ながらあまりプラスの評価は聞かない。魅力があるのは、実務に應用できる十分な知識と良識を持った、リーダーシップのある人材である。一東大生ならではのエリート意識があると言われるが、それがリーダーシップの發揮につながらず、内面にとどまってしまう。そこで、人物試験や社会人入学などにより、知識や経験を異にする多様な学生を受け入れ、互いに切磋琢磨したり、ディベート的な科目をもっと取り入れて自分の考えを他人にさらして主張する訓練をしたらどうだろうか。また、知識を深める励みとして、学部生も含め、論文を公的に発表する場を設けてはどうだろうか。二一世紀には学部や大学の枠がますます薄れると思われるので、他の学部や大学の講義を受講したり、学部学科を変更することも柔軟に認め、より自由な発想で物事を探求できる環境も必要だろう。さらに、実務家による講座や企業や官公庁での研修、それぞれの学問分野に関連するボランティア活動への参加など、学生が実社会に触れ、学問と実社会との関わりを認識できる機会を設ければ、机上の学問が形を持つので面白くなるだけでなく、リーダーとして必要な人としての温もりや良識を備えることができるのではないかと考えているうちに、また大学に戻りたくなった。今ならば問題意識をもって研究に取り組み、少しは社会に貢献できるような気がするのだけれど。

石川 六郎



石川六郎（ししかわろくろう）：東京銀杏会会長、鹿島建設（株）取締役名誉会長。四八年東京大学工学部卒業。運輸省、国鉄奉職の後、五五年鹿島建設、社長、会長を経て九四年から現職。元日本商工会議所会頭、東京大学工学博士。

二世紀の東京大学への期待

グローバル化が急速に進展する中で、世界と協調あるいは競争しながら発展を先導するリーダーの存在が各分野で強く求められています。二世紀の東京大学に期待する第一は、このような国の将来を担う世界に通じる人材の養成ということなのです。

既存の枠組みでは捉えがたいような様々な問題が予想される二世紀において指導的役割を担う人材には、世界的な視野や配慮、深い洞察力、高い志、果敢に挑戦する気概等が特に求められます。それらに応えるための基本として、総合的な判断力や毅然とした倫理観、豊かな人間性の形成等を目的とした教養教育をより重視し充実すべきと思います。外国語、歴史、哲学、芸術等の思考や感性のバックボーンとなる知的遺産を広く体系的に学び、また、自らの考えを明確に伝える必要に応じて人を説得・論破する等の技能を習得することです。

これらにより基礎能力をしっかりとつけた上で、大学院を中心とする各種専門教育を充実し、社会に通じる実務能力や最先端の研究能力の習得を図るべきと思います。

具体的な教育手法としては、教授と学生のひとひととの触れ合いを重視した教育をより充実させる一方で、諸外国のトップレベルの大学との連携を強化し、高度情報通信技術を駆使して、世界中から提供される各分野のベストの教育を積極的に活用するという視点も益々重要になるものと思います。

東大における教育のあり方は、我が国の教育全体に多大な影響を及ぼし、国の未来を左右するものと言っても過言ではありません。東大が先端的な研究機関であると共に、世界に通じる高等教育機関となることを期待致します。

そのためには、大学への国費の投入が先進諸外国に大きく見劣するという制約を克服し、財源の多様化等を含め、財政基盤を強化する努力が求められます。また、様々な制約等もあり独自の創意工夫がなされにくい現状を改善し、大学におけるマネジメント機能の充実を図ることが大変重要です。現在行われている独立行政法人化の検討がこれらを推進する大きな契機となることを期待致します。いずれにしても、積極的に外部の意見や人材を取り込むと共に、外部への情報発信を心がけ社会の理解と支持を得ることが、これからの大学に求められる基本要件だと思います。

残念ながら、東大卒業生の中でも母校が大きく変わりつつある実状を知る人はごく限られているようです。変化の激しい時代において、知的最先端に位置する東大と、社会の様々な分野で活躍する卒業生の交流が

深まることは、卒業生、大学双方にとって意義深いことと思います。

東京銀杏会は、東京地域を対象とした東大の全学部を網羅する同窓会組織ですが、各地域の銀杏会（東大会）とも連携し、大学の協力を得ながら各種活動を積極的に進めていきたいと思っています。同窓会としても、同窓生相互の親睦を図ると共に、母校の改革を支援し、明日の日本を豊かな社会とすることにささやかなりとも貢献できればと考えている次第です。

ジョセフ・カーシュビンク



ジョセフ・カーシュビンク（Joseph Kerschbink）：東京大学大学院理学系研究科客員教授。七五年カリフォルニア工科大学卒業、七九年プリンストン大学大学院修士、博士取得。九二年カリフォルニア工科大学教授（地球生物学）。二〇〇二年より現職を兼任。

科学は弁当箱ではない

科学の基礎的発見は、総合かつ相互的性格を帯びてきている。これを私は、「科学の弁当箱現象」と呼んでいる。科学の主要分野はそれぞれ別々のお弁当箱に詰められているというのである。弁当の中にある大きな握り寿司が、ご飯粒、野菜そして少量のお漬物等と混ざって口のなかに入っていくので

ある。物理弁当箱にあった美味しいおかずは、ニュートンの法則、マックスウェルの方程式のような発見であった。生物弁当箱では、ダーウィンの進化論がご馳走で、化学弁当箱では、周期律表がキャンディーだった。ところが今やこれらの主要学問の多くは、すでに消化されてしまったご馳走の周りに残っているご飯粒だけになってきている。多数の人が、大好物の弁当箱が空っぽになりかけているのに気がつき始めている。

ところが、これらの物理、化学、生物、地球科学などの学問は、宇宙の自然を理解するために人間が独自に創作したものであることを認識してほしい。銀河系のどこかに存在するかもしれない高度な文明では、全く異なった観点から自然を探索する組織があるのかもしれない。彼らの世界では、初期の科学者によって導火された技術が、想像もつかない程我々からかけ離れているのかもしれないのだ。（例えば、頭のよいクラゲが最初に「りんごは浮く」という重力の法則を発見していたかもしれないのだ）

近年、主要な発見は、我々がいう古典的な領域分野の境界でなされている。私が抱く科学のイメージは、弁当箱というよりはむしろ「散らし寿司」であって、美味しい寿司飯と具の大海に、大きくて美味しそうのご馳走が浮いているものである。実際、私には伝統的な弁当の主要科学分野がこの大海に浮いているのが見える。そしてご馳走がお弁当箱の外にも浮いていて、喜んで食べられるのを待っているのかもしれない。

ここでわたしが「二世紀の東大」にどんなアドバイスが出るのだろうか。東大に集まる優秀な学生に、幅広く総合的な、また最良の師となるべき教育を与え

Expectation & Suggestion <<<

ることを大いに勧める。高校最終学年までには、大多数の理工系志望学生は科学に興味を示していると思うが、はつきりとした人生観をもっている学生は少数であろう。

大学側は、最初の二年間で学生にできるだけ多くの分析装置、手法に触れさせ、単一専攻分野を超えるような思考視野を広げるような努力をはらうべきであろう。私の経験ではあるが、成果が得られていると思う。三〇年前、カルテックに入学した私は、生物学と地球物理学の両方に興味を持ち、二者選択に困った。思案の末、両方を専攻することに決めた。当時、私はこの組み合わせが、今の“火星に生命”論争の中心となり、カンブリア紀における生体種の爆発的增加に、回転している惑星の大規模なダイナミックが関連している、という洞察が得られるとは夢にも思っていなかった。

以上を要約すると、まだまだあと二世紀ぐらいは、科学が動きつづけるのに必要な“ちらし寿司”はまだまだ十分残っているし、弁当を食へ尽くしてしまふ必要性はないということだ。

浅野 道子



浅野道子(あさのみちこ)：東海銀杏会広報担当理事。六〇年東京大学経済学部卒業。同年名古屋に就職。

青少年室長、婦人会館館長、美術館・科学館副館長等歴任。退職後、名古屋市シルバー人材センター副理事長。

二一世紀の東京大学

私は昭和三二年法経コースの文一へ入学した。女子学生はわずか三人であった。あこがれていた東大は私にとっては幻滅で、あの駒場での授業は、わくわくさせるものは何もなかったことを、四〇数年もたっても思い出す。卒業するときも女子には門戸が開かれてなく、私は地方公務員になったが、そこで世間の東大卒業生へ寄せる期待の大きさは愕然とさせられた。東大を出ていることがマイナスにしかならず苦勞させられた。男性に遅れて昇進するたびに、家庭との両立に血の出るような努力をしていても「東大を出ているから当然」の一言で片づけられた。

私は発足直時から東海銀杏会で広報を担当していて幹事をやっている。そこで、断片的ではあるが、色々な人に出会ったので、感じた事を率直に述べたい。

第一に組織に護られて安住している人もいる。肩書きをすべて取り払っても付き合っていない人がどれだけのいるだろうかと思わされる時がある。創造性を求められるノベル賞に、なぜ卒業生が少ないのか。人の痛みへの思いやりが少ないと感じる時もある。優遇されて当然だと思っているところがありはしないか。最近の不祥事に卒業生が多く関わっているのを、私はとても恥ずかしいと思う。

生涯学習社会と言われて久しいが、学歴より学習歴を重要視する社会となり、諸悪の根源は東大だと言う人も多くなった。今

までのままの東大であれば、東大不要論も出て来るであろう。国民の税金への関心が強くなるにつれ、その運営のありかたへの注文と風当たりが強くなる。余程思いきった改革がされない限り生き残れないと思う。

第一は入学制度の改革。単線ではなく社会人を多く受け入れていくこと。入学すればそれで人生が終わったかのように、スタミナの切れたお坊ちゃん、お嬢さんを受け入れるのでなく、本当に勉強したい人を、生活を助成しても受け入れて欲しい。これからの国を背負う人材の養成こそ最重要課題である。

第二は税金で運営するには限界がある。明治期の西欧文明を取り入れ、高級官僚養成の役目は終わった。先輩達に国費で卒業させてもらったという自覚が欠如している。国立だからとあぐらをかいていては、世の中から見捨てられよう。また、有能な頭脳が外国へ流出するのを防ぐ対策をとってほしい。

第三は外国の学生や女子学生はまだ少数だから、もっと門戸を広げると良い。女性の卒業生は各自とても努力していて、おおむね評判が良い。これからは企業のトップへもアメリカのようにどんどん進出するだろうし、その事を私は期待したい。素晴らしい知能と人格の持ち主、そして世界をリードしていく人材の養成、これからの東大に求められるのは、このことに尽きる。

ドナルド・キーン博士

ドナルド・キーン (Donald Keene)：コロンビア大学名誉教授。四二年コロンビア大学卒業。四九年ケンブリッジ大学大学院修了、博士取得。日本文学・文化・歴史

の研究者。菊池寛賞、読売文学賞、日本文学大賞、全文芸評論家賞など多数受賞。



二一世紀の東京大学に何を期待するか

日本の文化は、ヨーロッパの文化とは大きな違いを持っており、しばしばヨーロッパ人の価値観では価値がないと思われるようなものに日本人は価値を見出したり、ヨーロッパ人とは違い淡い味や、淡い匂いを好んだり、洗練された色彩を好む。こうした日本文化の特色が今ではヨーロッパ人に影響を与えており、フランスの一流レストランのフランス料理がその色彩感覚に日本の美意識の影響をはっきり受けているように、あるいは、ヨーロッパの近代建築が日本の影響を色濃く受けているように、日本文化は世界に強い影響を与えているという事実をしっかり自覚して、自国の文化研究を大切に、力を入れるべきである。その日本文化を積極的に世界に向かって発信してゆくべきであると思う。

本稿は、国際シンポジウム「東西交流と日本」(関連記事二二、二三P参照)で、キーン博士が基調講演をなさた際に、インタビュでご意見を伺ったものです。当日の講演が「世界の中の日本文化」についてであったために、話以上に方向になりましたが、有り難い励まし言葉をいただいたと同時に、責任を痛感させられた次第です。

(文責：小島 孝之 人文社会系研究科教授・留学生センター長)